B-30-1

41.6.21

名古屋タイムス

音楽評

迫る情熱、漂う熱気

ルービンシュタイン

名古屋演奏会

★場内が暗くなり、ステージに強い照明がおとされると客席のざわめきがピタッとやんだ。ステージの中央に黒く、大きな、コンサート用ピアノ。あぁ、体、このピアノから今夜はどんな音が誕生するか。

左手から黒の礼服に身をかためたアルトゥール・ルービンシュタインがピアノに向かって歩いてくる。そして、イスにかけ、ちょっと、目を見上げて呼吸をとのえたかと思うと、力強くそこには、めくるめくような巨大な音の連鎖。

★……まったく八十歳のこの巨匠のエピが出てきた音楽は、ピアノが冷たいメカニズムを持った楽器であることを忘れさせ、あたかも彼の肉体の一部であるかのように変容する。はずみ返ってくるようなツヤやかなリズム、絶唱のように押し寄せる情感、けらん豪華という陳腐な形容詞を使用もなく使わなければならないほど鮮やかなテクニック。眼ろうようなレガートの流れ、自在に変化するその音色美は、まさに名人芸中の名人芸、圧倒的な魅力でもって迫るのだ。

ベートーベンのソナタ作品31の3にはじまって、リストのソナタ・ロ短調、ショパンの小曲四つという編成だが、とりわけ傑出していたのがリストである。

音の立体的構成の処理のうまさは、まさに半世紀、世界のピアノ界に君臨してきただけあって、和音の厚、充実したひびきは例えようもなく美しい。ことに第一部アレグロ・エネルジコの入りでみなぎる強ジンリズム感、生命力に満ちた力動感は、ハッとするほど鮮烈で、なつかしい感覚。

★ショパンの四曲は、夜想曲ポロネーズ、をこえる。強烈なダイナミックス、明快なテンポの変化、名人的な考功、表現を随所にめしながら、全曲を通じて強ジンな緊張力をしめす。

ただベートーベンは、精神的なうるがりよりも、叡力的な推進力を感じさせたが、そこがドイツのピアニストと違ったところであろうか。アンコールではドビュッシーの「プレリュード」、ピラ・ロボスの「アルシネラ」、ショパンの「華麗なる円舞曲」をひいたが、ブラジルの作曲家のロボスの作品が強烈そのもの、〝高齢ではあるがき齢ではない〟情熱のほとばしった快奏をあった。

（二十日夜、中日劇場　平）

演奏中のルービンシュタイン